

主日礼拝説教「命が現れるために」

日本基督教団石神井教会 2018年4月8日

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。⁸わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、⁹虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。¹⁰わたしたちは、いつもイエスの死を体にまどっています。イエスの命がこの体に現れるために。¹¹わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。¹²こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。¹³「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語っています。¹⁴主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。¹⁵すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

¹⁶だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように。」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように。」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなされたが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

「あなたがたに平和があるように」

主のご復活を祝ったイースターから一週間が経ちましたが、わたしたちは、いまだイースターの喜びの余韻の中に立たせていただいています。

十字架の上で死なれて三日目の「週の初めの日」、すなわち日曜日にご復活くださり、弟子たちの前に現れてくださった主イエスは、そのとき以来、「週の初めの日」ごとに、弟子たちの集まりの真ん中に現れてくださるようになりました。教会は、それ以来、二千年間、最初のイースターの余韻の中で、日曜日ごとに集まり、礼拝をささげ続けてきました。先週のイースターも、そして今日も、わたしたちは、あの日以来のイースターの余韻の中に立たせていただいているのです。

「あなたがたに平和があるように」と、イースターの日に弟子たちの真ん中に現れてくださった主イエスは、お告げになりました。最初の「週の初めの日」の夕方に集まっていた弟子たちに、そうお告げくださり、そして、八日目の次の「週の初めの日」に集まっていた弟子たちにも、そうお告げくださいました。それ以来、弟子たちの教会は、日曜日に集まるごとに、この主イエスがお告げくださった言葉を、繰り返し聞き返してきました。主がお告げくださった言葉をお互いの中で交わす挨拶の言葉ともしてきました。使徒パウロは、この言葉を元にして、自分の送る手紙の初めには必ず、「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（Ⅱコリ 1:2）と書き記しました。そして、教会は、礼拝の中にひとつの儀式として「平和の挨拶」を組み込むということも、してきました。

「あなたがたに平和があるように」。この言葉が告げられ、耳にされるたびに、教会は、最初のイースターの日に弟子たちの真ん中に現れてくださったご復活の主イエスを思い起こしてきました。ただ思い起こすだけでなく、この言葉と共に、ご復活の主イエスその方が、教会の集まりの真ん中に現れてくださっていることを信じ、そのお姿をありありと見てきたのです。

イースターに続く日曜日に、わたしたちは、繰り返し、今日の福音書を聞き直します。なんと幸いなことでしょうか。イースターは、二千年前にただ一度起こってそれっきりの出来事、ではないのです。イースターは、その後繰り返し、弟子たちの集まりの中で起こり続けたのです。今に至るまで繰り返し起こり続けているのです。わたしたちは、日曜日の教会で、ただイースターの祝いの余韻に浸っているばかりなのではないのです。ここで、わたしたちは、二千年前にあの弟子たちが経験したのと同じイースターを、ご復活の主イエスが真ん中に現れてくださるといふ経験を、繰り返させていただいているのです。

「あなたがたに平和があるように」と、ここでわたしが告げるならば、皆さんは、この集まりの中に現れてくださるご復活の主イエスの言葉を、耳にしているのです。そうわたしが告げるときに、皆さんは、「また、あなたにも（平和があるように）」と返してくださればと思います。皆さんがそう返してくださるときに、わたしは、皆さんの真ん中に、ご復活の主イエスが現れてくださるのを見ることができるようからです。

「わたしたちは主を見た」

イースターの祝いからの一週間、どのようにすごされたでしょうか。あの弟子たちのように、でしょうか。それとも、トマスのように、でしょうか。

その日、弟子たちは、女の弟子のひとり、マグダラのマリアから、奇妙な話を聞いていました。マリアは、「わたしは主を見ました」(20:18)と告げていたのです。その日の朝、マリアら女の弟子たちが、主イエスの遺体が葬られていたはずの墓に行ってみて、そこにご遺体が見当たらなかったことは、すでに聞いていました。弟子たちの中のペトロともう一人の弟子が、墓まで行って確かめることもしていました。ところが、マリアは、その後、不思議な体験をしたと、弟子たちに加えて報告しに来たのです。墓の中に白い服を着た二人の天使が見えて、自分に語りかけてくれた。少しやり取りしていると、後ろに人の気配がして、墓の管理をする園丁だろうと思っていたら、そこに、主イエスのお姿が見えた。「わたしは、主を見たのです」。マリアは、そう報告していたのです。

そのマリアの報告を聞いていた弟子たちは、まさか、自分たちも同じことを告げるようになるとは思っていなかったかもしれません。けれども、その日の夕方、彼らは、一つ所に集まっているところで、主が真ん中にお立ちくださるのを見ることになったのです。その体験を、そこに同席していなかった仲間、あのトマスにも語らないではいられなくなりました。

イースターを迎えた者は、まだイースターを迎えていない者に、語らないではいられないのです、「わたしたちは、主を見ました」と。イースターは、ただ、どこかで主イエスがご復活されたというだけの客観的事実ではありません。「わたしも、主を見た」と語れるようになる出来事なのです。

もちろん、そう告げられた者が、「そうですか、すばらしい、わたしも信じます」と、すぐに応じることができるわけではないでしょう。トマスがそうでした。仲間の弟子たちが「わたしたちは主を見ました」と証してくれても、トマスは、「自分自身の目で見、手で触れてみなければ、決して信じない」と、かたくなな態度を取ったのです。

とは言え、トマスは、不信仰だったわけではないのです。トマスは、主イエスに忠誠を誓って、「あなたのためなら命を捨てます」(13:37)とまで言っていました。あるいは、仲間たちには「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」(11:16)とさえ言っていたのです。最初のイースターの日の夕方に、ほかの弟子たちと一緒にいなかったのも、わたしは、トマスがマリアの話を聞いて、きっと復活された主イエスを探し回っていたからだと考えます。主イエスに対する思いが強ければこそ、人の経験を聞いただけでは納得できなかったのでしょう。

けれども、そのトマスが、ほかの弟子たちと同じようにご復活の主イエスの姿を見るようになったのは、仲間たちから「わたしたちは主を見ました」という証言を聞いていたからこそ、なのです。主を見たという者たちの中に自分も身を置いたとき、トマスもまた、主を見る者となったのです。主が現れてくださることを、信じる者とされたのです。

主イエスの命が現れるために

主イエスは、もちろん、わたしたちの前に現れてくださる方法に制限をかけられていっしやるわけではないはずです。わたしたちに、ごく個人的に表れてくださるといことも、きっとあると思います。一人、密室にこもって祈っているときに、あるいは祈ることもできずに困惑しきっているときに、仲間の中に入っていくことができないときに、主イエスが傍らに来てくださって、わたしの名を呼び、語りかけてくださった、という経験をされた方は、少なくないでしょう。

そうだとしても、わたしたちは、あの弟子たちのように、またトマスのように、一つ所に集まるとい営みの中でこそ主イエスが真ん中に現れてくださる、という以上に確かなことを語ることはできません。この福音書の伝えることも、また使徒パウロらが伝えたことも、結局、そこに行き着くのです。

コリントの教会に宛てた手紙を記したパウロは、復活以前の主イエスのことを知りませんでした。弟子たちを引き連れてガリラヤの町々を回り、エルサレムへと向かわれた、あの主イエスには、お会いしたことがなかったのです。けれども、そのパウロも、主イエスとお会いする体験をしたと証しています。それは、霊的な体験と言うべきでしょうし、少なからず神秘的な出来事として伝えられているところもある事柄です。しかし、そのパウロが今日の箇所で語っているのは、むしろ、あの最初の弟子たちが経験したような意味での復活の主イエスを見るということなのではないでしょうか。

パウロは言うのです、「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きてい間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために」。パウロは、自分の身に引き受けている困難を語っていました。その困難は、「土の器」としての弱さによるものであり、脆く欠け多い者であるがゆえにものでしたが、しかし、それだからこそ、それは主イエスのご受難、主イエスの死を指し示すものだと、パウロは言うのです。自分は、自分の姿を、そのように理解している、と言うのです。しかし、それで終わりではありません。その主イエスのご受難と死を身にまもっている自分の体は、あなたたちが主イエスの命の現れるのを見る体なのだ、と言っているのです。「イエスの命が現れる」とパウロが言うときの「現れる」とは、福音書が復活のイエスが「現れた」というときの「現れる」です。「見えるようになる」という意味の言葉です。パウロは、自分の土の器が主イエスの死を指し示すものであるとき、あなたたちは、このわたしの体の中にイエスの命が働いているのを見ているのだ、と言っているのです。十字架の主イエスを身にまとう者は、復活の主イエスの姿を周囲の者に見せている、というのです。

わたしたちの互いの中に、主イエスは命の姿を現してくださっています。平和をもたらず命です。わたしたちの間に赦しをもたらし、交わりを回復してくれる命です。「わたしもあなたがたを遣わす」と、主は言われます。仲間のもとへ、隣人のもとへ、わたしたちは、復活の主の命を届けるのです。